45

ゲーテと医療
――とくにその死生観や彼の発見した顎間骨をめぐって――

鈴木　重統
介護老人施設 ゆう

はじめに

ゲーテはユニバーサリストといわれているが，医学においても骨を発見したり，彼自身の死生観をもってフーヘラントやシュヴァイツアーに「生命への畏敬」という概念を確立させさらにフーフェラントは「扶氏経験遺訓」を著し之が後の適塾の教えとなったので間接的ながら日本の医学にも影響を及ぼしていると思われるので之らについて言及する．

ゲーテが医学に興味をもったきっかけ

ゲーテは1749年ドイツのフランクフルトに生を享け助産師がとりあげたが，大変な難産であった．初孫が危うく死産しかけたのは助産師の技術が拙劣であったためと思い込んだ彼の祖父（フランクフルト市長）は，早速フランクフルトに助産婦学校を設立した．

一方，ゲーテ自身はギュムナジウム（中等学校）を終え1765年ライプチヒ大学の法科に学び自然科学の一部として医学の講義を傾聴したのも彼が自分の出生を通して医療に関心をもち続けた証しといってよい．1770年春，シュトラスブルク（現フランス領）で再び法律を学んだ際に医学生たちと交遊し，ロオブシュタインの解剖学，エーベルマンの産科学講義に出席したという記載もある．

顎間骨の発見で医学博士に

ゲーテの医学上の数々の業績の中で最も人口に膾炙しているものは，「人間にも動物同様に上顎には顎間骨（Os intermaxillare）がある」という発見である．彼は手に入りうる限りのあらゆる動物について顎間骨の形態や位置を詳細に検索し幼児の頭蓋骨においてその存在を証明した．彼の発見の陰にはイエーナ大学医学部解剖学ローデル教授（Justus Christian Loder）の指導と助力があったが，親友ヘルデルへの手紙には「自分の発見したものは，金でもなく，銀でもなく人間における顎間骨である．」と記している．

彼の研究の意義は，第一に人間とサルとの間に発生学上連絡がないという学説を覆したことであり，第二には比較解剖学の重要性を認識せしめたことである．

ゲーテの死生感

ゲーテは83年の人生に何度も大病を患い，充実した生へと甦った．中世のキリスト教の修道院のモットーは「死を想え」（メメント・モリ）であったが，彼は代表作「ウイルヘルム・マイスターの修業時代」のなかで「生きることを想え」（Gedenke zuleben）と唱えたのである．これに共鳴したのがアルベルト・シュヴァイツァー博士である．シュヴァイツァーはゲーテよりも130年以上あとに生まれたためゲーテの謦咳に接したこともまた講義をうけたこともないが，生涯ゲーテを尊敬してやまなかった．1928年にはゲーテ賞を受賞している．彼の生き方のなかにゲーテの作品を垣間見ることができる．

家庭医フーフェラントに与えた影響

ゲーテはワイマール公国の文部大臣時代にアウグスト侯爵とともにイエナ大学の教授に推薦した彼の家庭医フーフェラントに，彼が長寿学を出版するに当たり「甘美なる人生よ！生存と活動の麗しくも親しき慣わしよ！－汝から余は訣別せねばならぬのか？」いう巻頭言を送っている．これは現代における生活習慣病の予防に基本となる事項として注目される．その後フーフェラントはベルリン大学の医学部長まで務め「扶氏経験遺訓」を著しこれが後に適塾の教えとなった．両人ともに生前は鎖国であった日本に時空をこえて影響を及ぼしたことを伺い知ることができる．